ART ESSAY

アート★エッセイ

博士(ハカセ)になりたい

ヤノベ ケンジ
(美術作家)

気がつけばいつの間にか美術作家になっていた。とはいえ一般的な作家の印象である様に絵を描いたり彫刻を彫ったりしているだけではない。自家用電車を製作してレールを敷設しながら美術館内を走ったり、人工的に稲妻を作ったり、宇宙人のようないでたちの放射能防護服を作って原子力発電所事故跡地のゴーストタウン「チェルノブイリ」に訪れる。はたまた巨大ロボットやドラゴン船を製作して街なかで火を噴かせたり…。「ものづくり大好き」の子どものような衝動がそのまま巨大化したような作品とパフォーマンス。同時にその裏には反戦や反核のメッセージを潜ませる「現代美術作家」が私である。

思えば幼少の頃、「大人になったら何になりたい？」と聞かれれば必ず「博士(ハカセ)になりたい。」と答えていた。それは実在する科学者や研究者を具体的にイメージしていたのではない。失笑されるかもしれないが、その時本気で思い描いていたのは当時漫画やアニメに登場し、ヒーローを裏から支える「発明ハカセ」の事であった。彼らは宇宙人の侵略や大災害など地球の危機がおとずれると必ずそれを解決する秘密兵器を即座に製作し、いとも簡単に世界に平和を取り戻していた。魔法のように不可能を可能にする、科学と製作技術をもって何でも生み出せてしまう万能なその職業に強い憧れを感じていたのである。

だとすれば大人になった自分が名乗る「美術家」という職業は昔思い描いた「ハカセ」に近いのでなないかと思える。イメージするものは何でも作れて、世界の問題にも立ち向かえる創造者だ。

あらためて思う。心躍る想像力を翼に変えて世界を宇宙を自由に飛びまわれ、美的体験の可能性を広げられる数少ない場所のひとつ。それが「美術」という分野なのである。

(やのべ　けんじ)

「ラッキードラゴン」水都大阪2009での
パフォーマンス
撮影:塚正玲子

特集

つながる造形

第1回

授業でつながる

つながりとひろがり

平成21年12月2日、日本画家平山郁夫氏が亡くなった。まさに巨星墜つるの感がある。シルクロードの画家として世界的にも評価が高かった平山の作品については、改めて説明する必要はないだろう。

平山が中学生の頃、広島で被爆し、常に生命の不安をもっていたことはあまり知られていない。その不安の中で150回ものシルクロードへの旅をしながら、精力的に描かれた彼の作品の根底には、世界の平和を願う気持ちが流れている。

平山は、日本画の制作以外でもユネスコの活動や文化遺跡の保護活動に力を尽くした。また、「感性」の大切さを訴え、「日本感性教育学会」の初代会長を長きにわたって務めている。知性や理性に裏づけられた思考力や判断力のもととなり、芸術文化のみならず、科学や社会生活の根源に深くかかわる感性こそ、子どもたちの教育に不可欠のものであると訴えてきた。

日本画という美術の世界から美術文化を通して世界の人々の平和を実現しようと、そのつながりやひろがりを求めた平山の遺志を、残された私たちは造形美術教育の中でさらに発展させる使命があると思う。

造形美術を大切にするということは、図画工作や美術という教科を守るだけが目的ではない。この教科の学習を通して育て伸ばす「感性」や「創造性」などのさまざまな力を十分に使いながら、一人ひとりがそのよさを発揮し、互いに認め合える平和な世界を創るための造形や図画工作・美術の時間をさらに充実させ、必要性を広く社会に認知させることである。

造形美術を通して、人々がつながり、平和な社会が広がっていくことをキノコ雲のない天国の空から平山も見守ってくれることだろう。

座談会「つながる造形をめざして」

栗城敦志先生（埼玉県加須市立加須小学校）
小林恭代先生（千葉県佐倉市立井野小学校）
吉田岳雄先生（神奈川県横浜市立笹野台小学校）
鈴木　茜先生（東京都稲城市立城山小学校）
司会：藤澤英昭先生（千葉大学）

■「つながり」から何が生まれるか

藤澤　今回の座談会では「つながる造形」というのを包括的に考えて、いろいろな実践をされている先生方に集まっていただきました。

美術というのは、どちらかというと個人の中だけの出来事であり、個人の質に関わって、どんどん“私的”なことになりがちな傾向があるのですが、そういう状況を打破しようと思って、いろいろな意味で広がりというのを考える実践が、現在行われるようになっています。

それでは、どういう実践をされたか、お話を伺いたいと思います。まず、横浜から来ていただいた吉田先生に話題提供をお願いいたします。

吉田岳雄先生

吉田　横浜で今行われている、小中連携の取り組みについてということで、お話をさせていただきます。

横浜では、「横浜版学習指導要領」というものが出されました。「図画工作科・美術科」が連携をして、小中一貫のカリキュラムを編成しているところです。

「図画工作科・美術科」の９年間で身につける資質・能力の一覧というものを横浜市の教育課程研究委員で指針を提示し、これをもとに考えていこうということになりました。

具体的には、小学校と中学校が連携するため、ある中学校にいくつかの小学校が集まって一つのブロックをつくりますので、そのブロックに関わる図工・美術を担当している教師が集まり、検討しています。

つまり、各小学校ごとの学習内容が違ったり、漏れや落ちがあったりすると、それぞれの小学校から同じ中学校に上がってきたときに、経験や力も違うというようにならないように、カリキュラムの内容を検討しているのです。

『横浜版 学習指導要領』

そして、それぞれの地域の子どもたちが図工・美術でどのような資質・能力を身につけたらいいのかということや、材料・用具の体験は小学校段階ではこんなことをしっかり身につけて、中学校に送りましょうなど、めざす授業のあり方についての情報交換をしています。つまり、９年間の義務教育におけるカリキュラムを考えています。

藤澤　そうすると先生の学校では、もちろん、地域をベースにしながら、９年間という連続した学習体験をどう編み込んでいくかというところで、地域性みたいなものが出てくる可能性もあるのでしょうか。

横浜ならではのものというのは、何かあるのですか。

吉田　横浜市は18区あるので、それぞれの地域による特性もあります。それによって子どもの実態も結構違うので、そのあたりも意識して、「自分の中学校ブロックでは地域の教育力や地域の材料を生かして、こんな題材を入れよう」などと考えていけるようにしています。

藤澤　各ブロックごとに、地域性と児童たちのトータルな姿というものを見ていくということも、各教員に課せられているということですね。

それでは次に、東京の稲城市の鈴木先生から、実践に関するご紹介をいただきたいと思います。

鈴木茜先生

鈴木　私は「新しいツールを利用した豊かなつながり」ということで、実践をしてきました。

デジタルカメラやコンピュータなどを使っての交流が、これから子どもたちにはどんどん必要になってくるのではないかと感じ、視覚的なコミュニケーションという実践をしてみました。

題材名は、「あれ、こんな所に…発見！　謎の“宇宙生物”」というものです。

まず、「図工室だより」で、「材料を募集しています」ということを、保護者や地域の方々に呼びかけまして、材料を集めることから始めました。

そうすると、ものすごい反響があり、保護者や地域の方々が材料をたくさん持ってきてくださいまして、とても驚きました。「図工室だより」を読んで、子どもたちの造形活動のことを理解してくれているんだなと感じました。

ＡＰＡ日本広告写真家協会の写真家の方々をお招きして、子どもたちといっしょに、「宇宙生物は一体どんなところで、どのように生活していたんだろうね」というテーマで、デジカメで写真を撮るという実践をしてみました。

そうすると、子どもたちは、「カメラの使い方ってこうだよね」ということを言わなくても、どんどん撮っていました。もともと持っている感覚で表現していくんだなということを感じました。

そして写真家の方々といっしょに、子どもたちの作品を鑑賞しました。そのとき、子どもたちは、「友だちはこういう表現をするんだな」、「こういう感覚をもっているんだな」ということを感じて、新しい見方や表現のしかたを改めて発見したようでした。

「図工室だより」でも、「こんな実践をしました」ということを、保護者や地域の方々にお知らせしました。そうすると、「おもしろいことをやったね」というようなことを家で言われたという報告が子どもたちからあって、やってよかったなということを感じました。

藤澤　おもしろいですね。大変でしょうが、このように地域に情報を発信すると、地域も応えてくれるという感じがしました。それでは、埼玉の加須市の栗城先生から、ご紹介をお願いしたいと思います。

栗城　私が勤務する加須市というのは、うどんと鯉のぼりで有名なところです。手描きの鯉のぼりをつくっている店がまだいくつかあって、そういう歴史や文化を大切にしている町です。

栗城敦志先生

人口としては７万人ぐらいの小さな町ですが、この３月に、周りの三町と合併をする予定です。

私が勤務する加須小学校は、創立137年目を迎えるという古い学校です。ここでは、以前から地域密着型教育を推進しており、さまざまな形で学校にお手伝いや応援に来てくださる“学校応援団”という方々が、500人もいらっしゃいます。

本校では平成18年度から、「図画工作科」の研究を学校全体で取り組みました。これは、「図画工作」という教科を通じて、子どもたちの生きる力を高めていこうというものですが、その手立ての一つとして、“まちかど美術館”という活動に取り組みました。

これは、その名前のとおり、町の中に子どもたちの作品がある空間をつくるということです。本校の児童は700人ほどいますが、全児童の作品を町の中に展示しています。

これは、子どもたち一人ひとりの思いを大切にしたいという考えから取り組んでいる活動であり、年に３回実施しています。

まちかど美術館（加須市）

展示場所については、本校の学区内の古い商店街を中心として、近隣の民家や駐車場のほか、公共機関などを利用させていただいています。

最初は、１店舗から始まった“まちかど美術館”ですが、現在、店舗数では100か所を超え、民家やいろいろな方々も協力してくださっています。

そして、子どもたちや保護者はもちろん、地域の方々にもその活動を楽しみにしていただいています。

藤澤　今のお話の中で、“学校応援団“というのは、公式にかどうかわかりませんが、保護者ではない方々もそれに参加しておられるわけですね。そういう人たちは結構有力なサポーターということになりますかね。

栗城　そうですね。さまざまな形で学校の教育活動に携わってくださいます。例えば、子どもたちの安全を守るために、登下校の時間には主要な交差点に立って、見守ってくださったり、家庭科や図工の授業では、子どもたちが安全に学習できるように、その分野に得意な方々が応援にきてくださったりしています。

藤澤　それはなかなか頼もしい地域ですね。

それでは、千葉県佐倉市の小林先生に、実践例を紹介いただきたいと思います。

小林　私がいる佐倉市は城下町で、大変歴史があります。ただ、ベッドタウンということもあり、最近は住宅地がどんどんつくられています。

小林恭代先生

ですから、歴史はあるものの、住んでいる方々は新しい人が多いので、歴史を実感する機会があまりないという現状がありました。

そこで、図工でも地域について取り入れていくことが重要ではないかと考えるようにしました。導入から鑑賞まで、地域をなるべく盛り込んだ題材をつくってみようと前任校で実践したことがあります。

導入のところでは、佐倉市の先覚者である香取秀真（かとりほつま）、津田信夫の作品を紹介し、その地域で出土した土器を見せました。

また、学校の周りで採れた粘土を使って、自分たちで作品をつくらせました。そのときには、窯も自分たちの学校につくって、作品を焼きました。釉薬についても、学校の周りには木がたくさんありますから、それらを燃やして灰にしたものからつくりました。

授業風景（小林先生）

そして、今の栗城先生のお話と似ていて、名前もほとんどいっしょなんですが、“まちかど作品展”というものを開きました。地元の商店街の方々を訪ねて、「子どもたちの作品を飾らせてください」とお願いして、展示させていただきました。ただ、地域を訪ねたときに、最初はなかなかこちらが何をしたいのかが伝わらなくて、すぐに協力が得られたというわけではなく、１軒１軒訪ねてご理解をいただいたということです。

教員というのは、どうしても学校のすることだから、快く協力してもらえるだろうと思いがちですが、地域の人たちにわかっていただくためには、それなりの努力が必要だということを感じた実践でした。

あるお店では、私がお願いしたわけではないのに、「これを見せるだけではもったいない。地域の人たちからいろいろな感想をもらって、子どもたちに伝えてあげたほうが、絶対に喜ばれると思う」という言葉をいただいて、感想文用の紙を置いてくださったんです。

そうすると、地域の人たちがそのお店に来たときに、小学生の子どもがいない方も、感想を一言その紙に書いてくださって、大変感激しました。

地域の人たちは、子どもたちのために何かしてあげたいと常に思ってはいるけれども、どのように、何をしてあげたらいいのか、具体的にはなかなか思い浮かばないということだったんですね。でも、こういうアートが媒体になって、コミュニケーションが生まれたという結果が、この実践を通して得た一番うれしいことでした。

現在の勤務校では、近くに商店街がないので、全く同じ実践をすることはできません。ただ、地域の方々の力をお借りして、子どもたちのためにどう役立てていただけるかということをコーディネートするのが、教員の大事な仕事なのかなと感じながら、こういう実践に努めているところです。

藤澤　ありがとうございました。

今のお話ですと、佐倉市は歴史のある町で、地域出身の作家で、特に造形文化の方面で非常に秀でた方々がいらっしゃいますよね。

そういう方々のことを学び、そして、地域にある材料として粘土を使い、釉薬もつくっているということでした。これは、結構感激するような仕事ですよね。子どもはとても喜んだのではないかという気がしました。

■地域に根ざした実践

藤澤　地域との連携や地域に根ざした実践をしていくと、これらは一方通行ではないので、その実践の中で子どもも変われるだろうし、地域の人たちも変われるだろうと思います。そして、学校の「図画工作」というものに対する地域の人たちの目も変わってくると思います。

その辺については、実践をされていて手応えみたいなものは感じられていると思います。

例えば、子どもが地域の作家を知ったとき、「地元の人がこんなすごい作品をつくったのか」と感激すると思います。それから、その土地でとれた粘土で焼き物ができるということに対しては、かなり感動する体験だったと思います。

また、それをサポートしてくれるお年寄りも、子どもを教えながら、自分も教わる面もいろいろとあったような気がします。そういう具体的な例があるでしょうか。

私は、ときどき各市の小学校や中学校の美術展に行くのですが、お年寄りも見に来られます。自分の孫の展覧会を見に来たということかもしれませんが、自分たちが受けてきた「図画工作」と、孫が今受けている「図画工作」とは、ある意味では非常に違っていると思います。

「今の図画工作というのはすごいね。子どもがこんなに伸び伸びと、生き生きとやっているとは思わなかった」という感想を述べる人が結構いらっしゃるんですよ。

それは、つまり昔の「図画工作」というのは、いつも人と比べて、人のことが気になって、どういう作品をつくれば先生に喜ばれるかとか、人と違ったことをしていないかということがすごく気になって、あまり楽しい思いをしなかったという方が多いように思うんです。

それに対して、今の子どもたちは自由に動きながらやっているので、親にしろ、お年寄りの世代にしろ、その違いがよくわかるという気がしています。

そういう意味で、商店街の方々の意識が変わったという例を報告していただきましたが、ほかにそういう例はありますか。

小林　私が勤めている佐倉市の隣に八街（やちまた）という市がありますが、そこの中学校の美術の先生が、去年の秋に「アートプロジェクト」のような形の実践をされたという例を紹介します。

発端は数年前、美術部の生徒が地域の商店街のシャッターに絵を描くことを依頼されたことから始まります。それが地域の活性化につながり、地域の方々に大変好評となりました。今では、商店街の方々が材料費などを補助するので、子どもたちのアートで地域を活性化してほしいと応援してくださるようになったとのことです。

今年度は、やはり焼き物でしたが、小・中学校の作品を商店街に展示していただく“まちかど美術館”でした。買い物に来た方と子どもたちの作品で会話が生まれ、また作品を見る目的で訪れる方とも会話が生まれました。子どもたちの作品を核にさまざまなコミュニケーションが広がり、地域の活性化につながったと聞いています。

お店の中には、児童の作品をより良く展示するために、展示場所をあれこれと考えてくださったり、飾り方を工夫してくださったという報告もありました。子どもたちのアートの力を認めていただいた成果だと思います。

学校の外に飛び出した子どもたちの作品が、新しいコミュニケーションを生んでいること。子どもの作品による“まちかど美術館”の実践が、地域の大人を元気にし、地域の活性化につながるということ。それが、子どもたちを取り巻く地域の教育力をより温かいものへ変えていくこと。これらのことから、私は学校を飛び出す実践の必要性を強く感じています。

同様の実践が「アートプロジェクト」として、私の所属する千葉県の印旛地区でも徐々に広がってきています。

藤澤　それでは、今度は栗城先生から、そういう例を挙げていただきたいと思います。私の手元にいただいている資料の中には、「自分の子どもが創造して描くことに、成長を感じた」というアンケートの回答があったということですね。

これは、単発的な作品の紹介だと、その作品の出来映えの良し悪しみたいなところに、すぐ目が行ってしまいがちですが、“学校応援団“みたいな方々が、時系列というか、時間を軸にして見てくれることによって、それぞれの子どもの成長がちゃんと見えてきて、非常によかったという感想があったということでしょう。

地域に根ざすという実践の中では、そういう面も出てくるのかなという気がしますが、展示してもらうことによって、「子どもが変わった」というような例があればご紹介いただきたいと思います。

栗城　以前は人と比べられることで表現することが気にな

って、描いたりつくったりということのその一歩がなかなか出なかった、というような話がありました。

私たちが図工教育の研究を始めたころには、自分の表現に自信がないというような子どもの姿が見られました。

そこで、子どもたちの姿の改善に向けて取り組んだ実践の一つがこの“まちかど美術館”だったのです。この実践を通して、先ほど小林先生から、作品を展示したら地域の方々が感想を記入する場所を設けてくれたというお話がありましたが、私のところでも同じようなことがありました。

それから、保護者とともに子ども自身が「私の作品を飾ってください」と、展示先に直接お願いに行っているんですよ。

そこに行って、「展示していいですよ」とご許可をいただくと、作品を通じてそのお店の方々と直接的な関わりができるようになるのです。つまり、子どもと地域の方々、保護者と地域の方々がそれを通じて直接関わりができるようになったわけです。

また、返却してもらうときには、直接行けないという子どももいますが、行ける子どもについては、できるだけ保護者といっしょに行ってもらいます。そのときにその絵に対する感想をいただいてくるんです。

「電気ダコ」（鈴木先生指導作品）

「モコモコヘッピー」（鈴木先生指導作品）

子どもたちは、これまで自分や教員、保護者から評価を得ていました。そこに、地域の方々からの評価が加わったことが励みになっています。自分の作品に対して評価してくれたことがうれしくて、それが自信につながっていき、「また描きたい」、「もっとつくりたい」といった表現に対する意欲が高まってきたと思います。

藤澤　実際に“地域の教育力”というものを思い切り引っ張り出すことができ、その中で学校も結構サポートされているのでしょう。子どもたちも地域の人たちに愛されているということを実感できるということは、「図画工作」という授業だけの枠を越えても、よい実践になっていますよね。

ところで、鈴木先生からは、例えば、デジタルカメラのような新しいメディアを使いながらの実践という例を紹介していただきました。

この実践に際しては、“キャッチボール”のようなことはありましたか。

鈴木　大変多くありました。まず、子ども同士の“キャッチボール”というのがありました。写真を撮っていく中で、画面を見ることができるので、「見てよ、見てよ。すごいのが撮れたよ」と言うと、相手も「私もすごいのが撮れたよ」と、撮ったものをお互いに見せ合うことができるんです。

また、作品と自分が“キャッチボール”ということもあります。それは、「お、いい感じ！」というところを「パシャッ」と押さえるということでの“キャッチボール”があったということです。

藤澤　今のデジタルカメラというのは、撮ったあとのプリント代を考えずにたくさん撮れるので、気楽に記録がわりに写真を撮ることができるようになっていますからね。先ほどのお話のような“キャッチボール”ができるようになってくると、ますます新しい世界が生まれてきそうですよね。

吉田　私の学校は横浜市の旭区ですが、区の研究会組織があるので、それを活用して、「ぐるぐる展」や「巡回展」というものを行っています。

そして、同じ区の学校間で作品の交流をして、他の学校の子どもたちの作品から刺激を受けられるチャンスも年に１回あります。そういうところで「すてきだな。自分の表現に生かしたいな」などという気持ちになってくれたらいいなと思っています。

参観週間で保護者が来てくださるときに、ほかの授業だと保護者の方々と対話する余裕がなかなかつくりづらいと思います。しかし、図工の授業では、活動を保護者とともに対話しながら見ることができます。

子どもたちが活動している様子を見ながら、保護者の方々と意見交換をすることができ、「この題材ではこんなことをねらっているんですよ」、「こんなふうに子どもたちは楽しみながら、実はこんなことを体験を通して学んでいるんですよ」などと話しながら、保護者の方々と直接話せるのはありがたいですね。

そういうことを通して、保護者の方々に図工の担う役割というものを理解していただくことができるのではないかと思っています。

■実践を広げるために

藤澤　実践例とそこから得られた成果について、お話を伺ってきました。

今度は、そのような実践の中で、「意外とここは苦労した」というようなところがありましたら、ぜひお話しいただきたいと思います。

皆さんのお話を伺っていると、とても簡単にできたような印象がありますが、実際には、教室や図工室で、毎日同じようにやっているほうが楽に決まっているわけです。でも、教育の成果というのは、そういうところでは閉じられたものになってしまうと思います。

また、美術に対しても、可能性を閉ざしてしまうというようなところもあるものですから、エネルギーを使って、こういう実践をされていたと思います。苦労話のようなものがあったらお聞かせいただきたいと思います。

小林　作品もそうですが、子どもたち自身を地域の中にもっと出してあげたいと思うんです。しかし、今の教育現場では、時数が足りないので、どの学校の先生方も時数削減のために苦労されていると思います。

つまり、「まずは４教科を終わらせなければ」という思いがある中で、外に出すということはある程度の時間が余分に必要です。つまり、時間の制約という問題が根本にあると考えています。

あとは、子どもたちを外に開放してあげたくても、地域に出すには安全面も重要ですし、金銭面でも問題があるなど、ハードルがいくつもあります。

そういうハードルの高さに対して教師のエネルギーが十分にあれば、それらを乗り越えられるのですが、疲れていたり、忙しかったりすると、「まあ、いいか」というふうになってしまいがちだと思います。

藤澤　栗城先生の学校では、“学校応援団“というものがあるそうですが、それは、先輩たちの長年のご努力があってのことだと思います。そうすると、そのリーダー的な方とお話をすれば、比較的流れがよくなっていくのでしょうか。

栗城　そうですね。“学校応援団“というのは、自分たちの得意なものを、できる時間の範囲内で応援していただくというシステムなんです。「だれが何を多くやったとかいうことは一切言わないようにしましょう」ということでやっているんですよ。

ただ本校では、その代表的な人を「ふれ合い推進長」と呼んでいるのですが、10名ほどおられます。その方々は地区の会長であることが多くて、それぞれ推薦されてきた方々なんです。校内にはそういう方々のための部屋をつくり、“常駐”というか、少ないときでも３人くらい、多いときには10人近い方々がいらっしゃるんですよ。

そういった方々が教師とともに安全面を確保するために、いっしょに外に行ってくださるということもありますね。

藤澤　そういう体制をつくり上げるまでが大変そうですが、子どもたちの数が少なくなってきている今日、子どもたちをそれぞれの地域で大事に育てていこうというときには、こういう組織ができ上がってくるといいですね。

吉田先生の横浜では、どのような活動がありますか。

吉田　横浜美術館には「子どものアトリエ」という施設があります。そこでは、小学校を対象とした体験プログラムがいろいろ行われています。

具体的には、大量の粘土や学校ではなかなか用意できないような大きなダンボールなどを使ってダイナミックな造形遊びの活動を思う存分させていただいています。

あと、どこの自治体もそうだと思いますが、鑑賞するときには、美術館の専門スタッフが詳しい説明をしてくださり、子どもたちから意見を引き出してもらっています。

藤澤　例えば地域の核になるような施設があったときに、そこで思い切り活動ができるというのはいいですね。

■これからの造形教育に向けて

藤澤英昭先生

藤澤　先生方から苦労話を含めていろいろ伺ってきましたが、「学校を飛び出す」というような言い方というのも可能かと思います。地域に飛び出して、美術の活動をしたいと思っている先生方は、全国にはたくさんいらっしゃるのではないでしょうか。

それぞれの地域の特性というのがありますよね。例えば、「木々の緑に囲まれているところではどんな実践ができるだろうか」、「海辺の町であれば、どんな実践ができるだろうか」というように、いろいろな可能性があると思います。

そこで、これから何か手掛けてみたいと思っている全国の先生方に向けて、応援のメッセージをお願いします。

小林　先ほども申し上げましたとおり、子どもも作品も外に出してあげると、そこから得るものはとても大きいと思います。ただ、それは教師一人が頑張っても、とても難しいのではないかと思います。

こういう活動のよさというものは、みんなで協力して行うから、いろいろな気づきがあり、楽しいのだと思います。協力を得られるように、栗城先生がおっしゃっていたような“応援団”をつくっていけるようにする必要があると思います。

そのためには、一人の核となる人間も必要ですが、学校だけでなく、地域や保護者の方も巻き込んで、活動を展開していけたらいいのではないかと思います。

一人で頑張り過ぎると息切れしてしまうので、仲間を増やして、「こんなに楽しいんだよ」、「こんなにおもしろいよ」ということを発信していったらいいと思います。

藤澤　教師同士がまず同じような問題意識をもつようにするために、いろいろな場面で話し合ってみる必要があるということですね。

何も図工に限ったことではないけれども、“地域の教育力”を最大限に引き出すような組織を、いっしょにつくっていくということがあれば、相当いろいろなことができそうですね。

小林　そうです。そのための媒体として、図工・美術というものはとても有効だと思います。

これを算数でやろうとか理科でやろうとしても、できなくはないですが、図工ほど適した教科はないのではないかと思います。

作品や子どもの思いというものがあるわけですから、そこを通して思いを交換するということは、まさに図工・美術がもっている一番の特色だと思いますね。

そして、そういうことにも使っていけるんだということを、先生方や地域の方々にアピールしていけば、「図画工作」は大事なんだなとか、「図画工作」というのは子どもの成長にとって欠かせない科目だよね、ということも分かっていただけると思います。

微力ですが、そういうことを発信する側でありたいなと思っています。

藤澤　「図画工作」や「美術」の教育的側面の中で、非常に肝心なところですよね。

そういう意味では、栗城先生の学校は既にできているので、とても恵まれているという感じですが、将来に向けての計画もあるのでしょうか。

栗城　確かに今の環境は恵まれていると思います。しかし、この環境は初めからでき上がっていたものではなく、職員全体が一体となってつくってきたものです。

“まちかど美術館”は最初１店舗から始めたと言いました。そして、全校児童の作品についても、最初のころは職員が展示しに行っていたのです。

つまり、700点近い作品を持っていって、挨拶をしたり、飾ったりというようなことを積み重ねてきているわけです。

平成18年度に図工の研究を始めるときには、「なぜ図工の研究をやるの？ 国語や算数の方が重要じゃないの？」というような声が保護者から聞かれました。

またアンケート調査においては、多くの家庭で子どもの作品を飾っていないという現状が分かりました。地域への展示も初めから今のような数の協力店舗があったわけではありません。子どもたちを取り巻く現状をとらえ、一歩ずつアプローチをしてきた結果が、現在の形につながっていると思います。

私は、このように多くの人が支えてくれる環境ができたポイントは三つあると思います。

一つは、先ほど小林先生からお話がありましたが、情報の発信ということがあると思います。本校では、「図工でこういうことを今行っていて、子どもたちはこんな力を発揮しているんだよ」ということを毎月「アート通信」で、地域の掲示板や市役所に掲示しています。こんなことを実践しているんだということを、みんなに知ってもらえるようにしているわけです。

二つ目としては、保護者や地域の方々に実際に体験をしていただくことです。その一例が保護者や地域の方々同士で行う「ギャラリー・トーク」です。

これは、どの子どもの作品かわからないようにしておいて、保護者たちがその絵を見ながら、ギャラリー・トークをします。「へー、そんなふうにも見えるんだ」ということを、保護者自身が体験することによって、自分の子どもが持って帰ってきた作品についても、敏感になれることが多くなっていきました。そのため、子どもが持って帰ってきた絵を通して、子どもと保護者の会話がどんどん広がっていったという話も聞いています。

三つ目としては、子どもの学びの姿を実際に見ることができる点が大きいかと思います。つまり、“ムービング・ミュージアム”と呼んでいるんですが、動く先々に美術館があるということです。

町や学校に全校児童の作品が飾ってあるので、それらを見ながら、１年生から６年生までを“縦割集団”にして、ギャラリー・トークをして歩くんです。そうすると、１年生が素直に言ったことを、６年生が「あ、そうだよね」と認め合ったりすることもあります。

また、より深い見方をする上級生を見て、低学年の児童は感心することもあるわけです。

しかも、そういう姿を保護者が見ていて、「あ、うちの子は、こんなふうにいろんなことが言えるんだ」、「説明ができるんだ」、「こんなに感性が豊かだったんだ」というような印象をもつことによって、学校の教育活動にも理解を示し、協力的になってくださっていると思います。

鈴木　先生方のお話を伺っていて、地域とどんどんつながっていきたいという気持ちが大きく膨らんできました。

今回、私はデジカメを使った実践の例をお話ししたんですが、こういうものは私が小学校のときにはなかったんです。しかし、これからの子どもたちは、デジカメのようなツールを利用して、地域と交流していくことが、もっと増えていくのではないかと思っています。

私自身がもっとツールを利用して、「さらに地域とどうやって交流していけばいいか」という実践の方法を考えていかなければならないということを感じました。今後ともいろいろなところでつながりをもって勉強し、他の先生方の実践を見て視野を広げていけたらいいなと思っています。

藤澤　今回お集まりいただいた先生方は、比較的東京の近郊の方々でしたが、山間部などであればあるほど、“地域の教育力”というのはとても大事です。自分たちは気がつかないけれども、地域に伝わるいろいろな行事などによって、独特の造形感覚というものをもっていたりするものなんです。また、造形材料もいっぱいあるわけですよ。

ですから、主旨は先生方が今おっしゃったことでしょうが、それぞれの地域で考えていただければよいのではないかと思います。

■おわりに

藤澤　今まで先生方から、興味深い実践例や、子どもたちの姿を伺うことができました。

実は、「図画工作」に限らず、平成元年くらいから学校がすべての教育機能を一元的に扱うという時代は終わってしまっていて、それ以上学校は負担しきれないので、当然、社会も家庭も応分の協力をして、子どもを育てていきましょうという合意のもとに、現在の広い意味での教育が成り立っていると言えます。

そして、各先生からのお話によると、それに一番乗りやすいということで「図画工作」や「美術」は、地域への広がりを見せていると思います。

そして、子どもが成長するだけでなく、地域も成長してくれるといいですよね。保護者やお年寄りの人たちの感性も、だんだん変化していくというのは、ほんとうにすばらしいことですね。

子どものハッピーな表現に触れて、「なぜ私たちは古い表現ばかりしていたのか」というようなことに気づくこともあると思うのです。これからも元気よく、いろいろな実践をしていっていただきたいと思います。

本日は、お忙しい中お集まりいただき、ありがとうございました。

まほうの力をもつ時計

埼玉県戸田市立芦原小学校　長尾 宏一

「夢をつくる時計」

1. 題材を考える

新しい題材を開発するときは、子どもたちの実態をもとにして次の点を考慮するようにしている。

①関心・意欲を高めるものであるか。
②どんな資質・能力を高めるのか。
③表現が多様に広がっていくものであるか。

何よりも、子どもたちが表したいと思う内容であり、発想が広がる題材であることを大事にしたいと思う。

今回の題材は４年生を対象に考えたものである。現実的にはありえないけれど、「まほうの力」で「こんなことができたらいいな」という願いを自分の絵で実現できる楽しさを味わってもらいたいと考えた。子どもたちの夢と発想力を広げ、表現する楽しさや喜びを感じてもらうことをねらっている。

ここで、「時計」としたのはどうしてか。まほうの力をもつものを何にするか、子どもに任せた方がいいのではと考えもしたが、ドラえもんがポケットから出すアイテムのようになってしまったり、逆に何にしてよいか発想が広がらない子どもがいるのことを考慮した。「時計」は誰でも簡単に表すことができるものであり、さまざまな形にすることができる表現の可能性がある。また、「時計」に焦点をしぼってみんなで話し合うことができる。まほうの力をもっていたらどんなことが起きるか、話し合いをもとにして自分なりに楽しく想像の世界を広げることができると考えたのである。

2. 材料・用具の準備

◆**材料**：画用紙、色画用紙（四つ切り、正方形や細長い形のものも考えられる）、紙の切れ端、きれいなデザインの紙、コンテ、チョーク、おしゃれなお菓子の包み紙や包装紙など紙類

◆**用具**：絵の具一式、クレヨン・パスなどこれまでに使ったことのある描画材

3. 表現のプロセス

(1) 題材名から発想を広げ、話し合う

・どんな不思議な力をもつ時計が考えられるか、みんなでアイディアを出し合い、想像を広げてスケッチする。

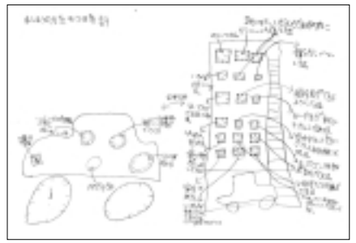
導入時に仕組みやデザインがおもしろい時計の画像をスライドショーで示し、概念にとらわれないで時計を考えることへの関心を高めるようにした。次に、「まほうの力をもつ時計」という題材名を示し、「まほうの国に迷い込み、不思議な力をもつ時計を見つけた」といった設定の話をして、不思議な力をもつ時計をみんなで考え、発表し合うようにした。その際、「花・星・虫」など何を時計にするかを考えるようにして発想のきっかけとし、「音符の形をした時計から美しいメロディーが流れて動物たちが集まってくる」など、不思議な力をもつ時計の例を示して、子どもたちの発想がふくらむようにした。

話し合いで出たことをもとに、子どもそれぞれがイメージカードに簡単な絵で描いたり言葉を書き込んだりしてアイディアを考え、ふくらませていった。

ここからは、Ａさんの表現過程を追いながら実践を紹介してみたい。

みんなのアイディアを聞いた後、早速Ａさんは自分が考えた「不思議な力をもつ時計」を、イメージカードに絵と言葉でかき始めた。初めは、ごく普通の時計機能をかいていたが、段々とアイディアが浮かんできたようで、「初めて見たよ。すごいよ」と声を掛けた。

４年生ぐらいになると、画用紙に描く前に発想・構想を練ることができるようになる。絵だけでなく言葉を加えると自分のアイディアを確かめながら考えることができる。



(2) 表したいことを決めて描く

・不思議な力をもっている感じが表れるように、時計や周りの様子を描く。

イメージカードに描いたいくつかのアイディアの中から車をもとに画用紙に表現を始めた。車の描き方は稚拙ではあるが、画面をいくつかに分割して描くというユニークな方法を考え出した。色の塗り方も、普通の子どもたちはメインのものから取りかかるが、Ａさんはまわりから始めた。しかも車のライトの黄色を先に塗っている様子から、先のことを考えて計画的に進めていることが分かる。

(3) 表現方法を工夫して表す

・自分のイメージをもとに、これまでに経験した表し方を生かしたり、新たな方法を考えて表現する。

メインになる時計車のまわりをクレヨンで塗り始めた。しかも、色を重ねたり、タイルのように色を並べている。クレヨンは低学年までの描材ではなく、活用することを指導している。学年が上になるにつれて使い方を工夫することができるし、絵の具とは違う味わいがあるからだ。この様子から、Ａさんは創造的技能を十分に発揮していると評価できる。「いい方法を見つけたね。初めて見たよ。すごいよ」と声を掛けた。

(4) 絵のお話を書き、鑑賞し合う

・絵の話をカードに書き、自分の絵を紹介したり、友だちの絵のよいところを話し合ったりする。

車についている時計が動くと、どこにでも行けることを表したかったので、画面をいくつにも分けていろいろな所を走っている車を描いたのだと言う。画面の分け方がユニークで、配色や色の塗り方に工夫がある。車のボディは、以前体験した「にじみ」を使っており、(3)で紹介したクレヨンの新たな活用も効果的だ。私が考えもしなかった表現に出会うことは、何よりもの喜びであり、称賛を超えた価値あるものといえる。

4. 実践を振り返る

時計の形を何にするかで、発想が広がる子が多く見られた。これが、子どもたちの発想を豊かに引き出したポイントとなったと思う。不思議な力を何にするかと問いかければ、時計ということからタイムマシーンのようなものしか思い浮かばなかったかもしれない。

どのようにしたら子どもたちの発想を広げることができるか、見通しをもって手立てを考えることが大切であることを改めて感じた。

（ながお　ひろかず）

強くてやさしい組み木パズル

～「何に見える？」から広がる造形と楽しい鑑賞～

東京学芸大学附属世田谷小学校　大櫃　重剛

1．楽しい題材が生まれる瞬間

本題材は、子どもの遊ぶ姿から「きっと楽しくなる」予感をつかみ、つぶやきから着想を得ている。

①パズル遊びから教わったこと

高学年が木工の活動後に回収するさまざまな形の木片を、低学年が再び引っぱり出す。「おっ、これはカエルの足になる」、「違うよ。こう見れば天使の羽でしょ」と自分なりの意味づけをして遊ぶ。また、並べ方をかえたり、友だちと部品を交換したりして「いいね、その形。もう一つ違う部品を探そう」と盛り上がる。「３人で合体したら、どんな形になるかな」。

見立て遊びから始まった木片の山はいつしか素敵な造形となり、没頭する姿に題材の可能性を感じた。

②「どうせ持ち帰っても…」問題を解決したい！

授業でつくりあげた作品を大事そうに持ち帰る子は多い。だが少なからず、真剣に取り組んだ作品を見つめてこんな溜息を耳にする。家庭に造形活動への理解を求める上で、作品保管の配慮も重要である。デジタルカメラで撮影・印刷したプリントという形で返却することもあるが、立体のもつ迫力を伝えつつ、コンパクトに保管する方法をこの題材に見出した。

これらの期待と課題を題材としてつないだのは、2005年東京都現代美術館で開催された「イサム・ノグチ展」で出会った習作である。デッサンをもとに小さな原紙の部品を何度も組み合わせ（アルミやブロンズに鋳造するまで）試行錯誤する作家の姿が、子どもたちのあの楽しそうな様子と重なった。

2．題材の概要

かきつぎやだぼの組み方を使って、板材を立体に表現する活動。形の組みかえを楽しみながらつくる。

（1）学年・時間

第６学年・６時間

（2）材料・用具

杉板（厚さ10～12㎜）、電動糸のこ、きり、やすり、紙やすり、工作用紙（模型用・ものさし用）、チョーク、鉛筆、木工接着剤、木工用絵の具、（だぼ用：ハンドドリル、だぼ、丸棒・太さ６㎜）

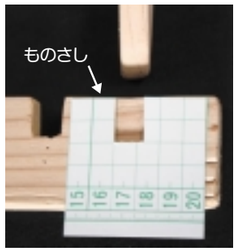
（3）授業の展開

①導入（鑑賞）　児童の実態や関心に応じたテーマで導入する。試作の段階で話し合い、想像を広げる。

●昔の人ってスゴイ！　組み木の工夫（建築・家具）

●イサム・ノグチ「彫刻のワークシート」より

②工作用紙で１／４大の模型をつくりながら、どんな部品の形にするか考える。はさみで切りこみを入れれば、連結部分を理解できる。（ただ、杉板の厚みによって直角に組まれることを事前に確認したい）



③杉板の厚みと同じ幅の切りこみの形を板にかく。

④直角に切りやすいよう、角にきりで穴をあける。

⑤電動糸のこでていねいに切りぬく。（幅広く切りすぎたら、間伐材テープを内側に貼って調節する）

⑥やすりがけをして、木材のよさを引き出す。

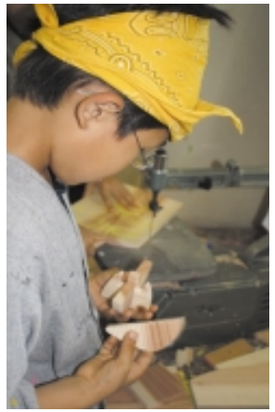
⑦部品をいろいろな形に組みかえて遊んでみる。

⑧木目の美しさを際だたせるように塗装する。（木工用絵の具で色の組み合わせを楽しむのもよい）

（4）活動の実際

杉板にチョークで部品の形をかきこみつつ、作戦会議を始める子どもたちのやりとりは要点をついている。

「最後にみんなで組み合わせて大きくしようよ」、「部品をたくさんつくりたいね」、「でも、こんなに小さな部品だと切りこみを入れられるかな？」、「長くて大きな部品にしているのは、どうして？」、「胴体みたいに真ん中を大きくすれば、いろんな方向に足をつけられそう」などと発言している。



隣りでは工作用紙の模型と板の違いに気づき、「板は分厚いから直角にしか組めないんだ」、「紙だとペラペラだったけど、板を組んだら頑丈になって立った」など、構造や強度について発見する子もいる。

また、偶然に細長い部品を床に落としてしまった子が、こうつぶやいていた。「この板、こんなに長いのにキレイに木の線でまっ二つになっちゃった。切り方を変えなきゃダメだね」杉板は柔らかく加工しやすい反面、木目に沿って割れやすい欠点もあること、そして対処法を経験から学んだ場面だった。

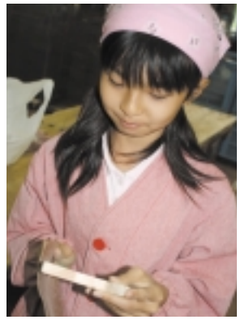
さらに、組み方を理解するにつれ、自分らしい方法を工夫し始めチャレンジする子も出てきた。

「見て！　こうすれば飛行機の翼みたいでしょ」と、自信たっぷりに作品を友だちに紹介している。

この頃になると教室は杉の良い薫りで満たされて、木と真剣に向き合う表情でいっぱいになっていた。

3．活動に内在する共通の「快」

高学年になると、既習経験をいかして技能や表現方法を自分の思いや考えに合わせて選択できるようになる。そこで個々が感じ、表した差異を意図的に交流する場をつくろうと、授業者の私は進める傾向があった。しかし、この題材で学んだことは「彼らがこの歳でも材料とじっくり向き合い、その感触を心から楽しんでいる」、そして「友だちとその心地よさ（快）を共感しあう場を欲している」ということだった。それは今までの体験の不足ではなく、高学年らしく自分と向き合うために必要な過程なのだと、彼らの表情や作品から確信している。



「ここ、すべすべだよ。もうやめられなくなる」
「ツルツルにするほどかわいくなってきた」

もう一つ、展示方法でも友だちとの見方を伝え合う喜び（快）を考えたい。展示作品とは違う組み方を撮影した画像を名札に添えるだけで、作者と鑑賞者の見方はより多角的になった。「私がこの形に題名をつけるならね…」と、楽しい鑑賞は続いていく。　（おおびつ　しげたか）

白いものがたり

東京学芸大学附属小金井小学校　立川 泰史

1. 題材の主旨とねらい

この題材は、生活の身辺から「白いもの」を見つけて持ち寄り、材料や場所の特徴を基に思いついたことを表す造形遊びである。高学年の造形遊びでは、活動する場所の様子が材料の使い方や組み合わせで変わっていくよさやおもしろさを味わいながら、試す工夫を大切にしたい。子どもたちが集める白い材料は、形や材質によってさわり心地や透明感もさまざまだが、「白さ」も微妙に異なっている。異なった材料の組み合わせや同じものの重なり方でも白い色の見え方が変わるという特徴がある。さらに、置く場所の光や奥行き、広さによっても色味が違って見えたり、風で形や動きを変えたりする。このように「白いもの」は、活動する周囲の様子を素直に映し出し、材料や場所の特徴が相まってできるさまざまな可能性を目に見えて際だたせることが期待できる。

それだけに、場所の特徴とかかわりながら「白がつくる眺め」の微妙な印象の変化に気づいて工夫するなど、高学年の経験に培われた発想や技能を働かせる造形活動が望める。ただ、こうした活動では、場面ごとに試される工夫が子ども一人ひとりの直感的な操作の楽しさに終始しがちである。そこで、友だちの感じ方と交わり、自分たちの活動の意味を物語るように伝えられることもねらいや評価の観点に入れておきたい。

2. 活動の事前指導と準備

活動は、子どもたちが「白」という色に注目し、暮らしにある多様な素材を集めることから始まる。しかしなぜ「白」に注目するのかという喚起がなければ、この準備の意味も薄れる。白い色の世界に関心をもって生活を観る目をもてるよう、白から連想することを自由に出したり、教科書や現代美術の白い作品などを見ながら感想を話し合ったりした。白い色については「現実味に欠けて空想の世界のような感じ」「清い、神聖な感じ、威厳のあるイメージ」、「軽い、高いところに行く感じ」、また「弱い、優しい、透明な感じ」に対して「強い、何も寄せつけない感じ」などがあった。簡単なやり取りによって「白から連想するもの」が「雪、雲、羊」などの具体物だけだった子どもにも、「無、純粋、素直」などの抽象的なイメージを語る子の言葉が響いていたのが印象的だった。

3. 授業の展開と活動の様子

(1) 活動のはじまり

実際に集まった材料は、スチレンのトレーや紙コップ、紙ひもや賞味期限の切れたそうめんまでさまざまだった。チームで活動する場所に目星をつけたり、活動のとりかかりにできそうなことを見つけ合う。この場面では、あまり材料を中心に考え込まず、率先して見当をつけた場所へ材料を持ち出すほうがよいと感じた。特に、雨天などで活動場所に選ぶ条件が限られる場合には注意したい。そこで教室内の活動と屋外の活動の実際を紹介したい。

(2) 活動展開の実際

〈教室内の活動〉

雨天のため決して広くない教室内の活動に限られた学級では、天井に通っているパイプから机や椅子、壁の突起や床まで、上下左右に向かって活動が展開した。白い材料の組み合わせをいくつかつくりながら場所を吟味するチーム、初めから高い場所に魅力を感じて材料を選ぶチーム、机の上に置いた椅子を柱につくった白い屋根の下にもぐるなど、多様な取りかかりがあった。どのチームも「まずやってみたこと」から次の操作を発想している。発言力のある子の「言葉の計画」が優先されても、メンバーの審美眼に耐えなければ、次々と代案が検討される様子は共通している。白布の屋根の下で透き通る蛍光灯の光を楽しんでいたチームは、その透明感を生かして床から天井まで広がる氷山風景を思いついた。そこでは不透明な白との組み合わせに関心を寄せていたのが興味深い(写真１、２)。

紙皿を組み合わせて大きなドームをつくったチームは、それを空中に持ち上げたくなり、他のメンバーがつくっていたハンモック状の雲に乗せてみる。全く別に進んでいた活動が突然合流するのも活動の広がりを感じる出来事である(写真３)。

また、窓辺を陣取ったチームは螺旋に切った帯紙で白い雨を降らせた。

写真１

写真２

写真３

〈屋外の活動〉

屋外で場所を十分に吟味できた学級では、陽ざしが照らす白い色の変化や影の効果などに注目したチーム、紅梅の花とのコントラストで白いものの魅力を効果的に見せようとするチーム、ジャングルジムなど、いつも使っている遊具を白いもので包んで影の眺めを楽しむチームがあった(写真４)。このような場面でも、白い色にもっている印象が発想や感じ方に深く関係しているように思える。他では、枯れ枝に白い花実を咲かせて春を呼んだり、原色のベンチを白くしてダイナミックな変化を味わったりしている。ベンチは綿雲で覆われ、白い紙や細いそうめんの棒が林のように立ち並ぶ。外光のせいで白い色味の幅が広く、見る方向によって全く違う印象になることに子どもたち自身が気づいている(写真５)。また、大きな池に白いロープを渡し、白い箱をロケットのように投げ合うチームもあった。白いものが素早く走る動きを水面に映して楽しむという趣向である(写真６)。

写真４

最後にあげたいのは、ブランコの支柱に白いシーツを掛け「笑顔で乗る」といった参加型の表現である。「天にも昇る気持ち」という物語だが、体の表現と場所・材料の特徴を組み合わせた即興的なアイディアは、むしろ高学年らしい。

写真５

写真６

(3) 伝え合う活動

活動はいずれも子どもらしい物語を通して語られ、白や場所との関係のとらえが自然に登場する。「白の魅力は他の色やものと並んだときにはっきりする」という感想が大きな共感をよび、「白いものがたり」は幕を閉じた。

（たちかわ　やすし）

さわりごこちを楽しむ

埼玉大学教育学部附属小学校　武田 圭介

1. 新しい学習指導要領との関連

図画工作科では、学習指導要領の改訂にともない、目標及び内容の改善が図られた。鑑賞領域においては、言語力の育成に配慮することが改訂の要点としてあげられ、「話したり、聞いたりする」、「話し合ったりする」などの学習活動を位置づけることが示された。

また、『学習指導要領解説図画工作科編』「B鑑賞」において、各学年における指導すべき事項が「ア 活動の対象や概要」「イ 活動の方法」として整理して示された。具体的に中学年においては、「ア 自分たちの作品や身近な美術作品や製作の過程などを鑑賞してよさや面白さを感じ取ること」、「イ 感じたことや思ったことを話したり、友人と話し合ったりするなどして、いろいろな表し方や材料による感じの違いなどが分かること」と示されている。

本題材はこの内容を受け、言語活動を取り入れながら、よさやおもしろさを感じ取るようにするための鑑賞題材として位置づけている。

2. 本題材のねらい（概要）

子どもたちは、材料と触れ合い活用する中で、諸感覚を働かせ、材料の形や色、質感等の造形的な特徴に気づいていく。多様な見方や感じ方は、材料への理解を深め、活動の幅を広げていく。

本題材は主に質感に着目し、さわりごこちに焦点を当てた鑑賞活動を行っていくことで、普段とは違う材料に対する見方や感じ方を養い、その理解を深めていくことをねらいとしている。

3. 題材の概要と方法

本題材は、さわった感じの違う材料を集め、それぞれの材料を台紙に貼ってみんなで持ち寄り、「さわりごこちコレクション」をつくっていく。そして、さまざまなさわりごこちの違いをさわって楽しみながら鑑賞していく題材である。

多様なさわりごこちの違いに気づくことができるように、友だちとの交流を位置づけ、互いのさわった感じのイメージを話し合いながら鑑賞活動を進めていく。

4. 題材の展開

①多様なさわりごこちの材料を集める

数週間前に活動を予告し、さわった感じの違う材料を自分で集めるようにする。材料集めは表現のきっかけとなり、集めていく段階から発想や構想の能力を育てることにつながっていく。材料は、朝の会などを活用して紹介し合う場を設けることで、さわった感じの違う多様な材料を集められるようにしていく。

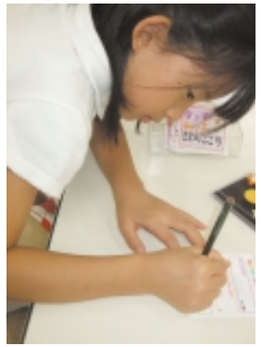
②「さわりごこちコレクション」をつくる

授業の導入では、集めた材料を友だち同士でさわり、どんな感じがしたかを伝え合う活動を行い、発想や構想の能力を働かせるきっかけとする。

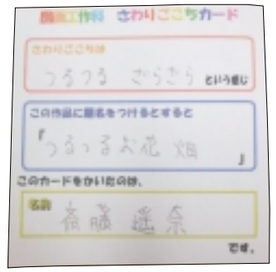
次に、集めた材料を種類ごとに台紙に貼っていく。台紙は10cm×10cm程度の色画用紙を使用する。台紙の大きさに入るように材料を切ったり、並べたりして貼りつける。材料の表や裏、立体的なものについては、向きによってさわりごこちが変わってくるので、アピールしたいさわりごこちがより伝わるように、貼り方を工夫する。そうすることで、同じ材料でも多面的な見方ができるようになる。また、材料の色に合わせて、台紙の色を選択できるようにし、視覚的にも楽しめる。

「綿は、ふわふわした感じがするな」

台紙の裏には、「ざらざら」「つるつる」「ふわふわ」など、自分の作品にさわった感じを言語化して記入した「さわりごこちカード」を貼らせる。



つくった作品は、一つできたら教室の中央に用意したテーブルに置き、誰もが立ち寄って自由に鑑賞できるようにしておく。自然と子どもが集まり、さわった感じについて話し始める。そのよさやおもしろさを感じ取ることができるようにする。そして、鑑賞した作品をきっかけに、さらに発想が広がっていく。



さわりごこちカード

こうしてできた作品を個々に数多くつくり、みんなで持ち寄り、「さわりごこちコレクション」をつくっていく。

「チクチクする感じだけど、A君はざらざらと感じたの？」

③「さわりごこちコレクション」を友だちと話したり、話し合ったりしながら鑑賞する

「さわりごこちコレクション」のそれぞれの作品について、さわりごこちの違いを味わう。同じ作品でも人によって感じ方はさまざまである。作者の書いた「さわりごこちカード」を参考にしながら、個々の感じ方を友だちと話し、互いの感じ方について伝え合う。互いのさわった感じを確かめることにより、自分が表現したものが他者に鑑賞される楽しみを味わうとともに、感じ方の違いに気づくきっかけにする。

次に、似たさわりごこちを集め、グループ化していく。グループをつくる際、さわりごこちについて多様な意見の交流が生まれ、それは、子ども同士のかかわりを生み出し、友だちとの対話から造形的な思考を活性化させていくことにつながっていく。子どもたちは、さわりごこちを確かめながら、ちょっとした違いにも気づいていくことになる。

「この凸凹する感じと似ているのはどれかな？」

グループ分けした「さわりごこちコレクション」は、違う班の友だちに見てもらい、どのような観点でグループ分けを行ったのかを推測させていく。そうすることで、多様な感じ方について理解を深めていくようにする。

「ふわふわコレクション」

「つるつるコレクション」

5. おわりに

子どもたちのやりとりする場面に教師が立ち会い、表し方や材料による感じの違いへの気づきを称賛したり、発する言葉を意味づけたりすることによって、子どもたちの感覚をより高めることができる。

本題材を通して、さわりごこちを中心に、材料への見方を広げるとともに、互いの感じ方の違いのおもしろさを十分に味わわせることができるであろう。

（たけだ　けいすけ）

大きな図工室　旭川

北海道教育大学附属旭川小学校　泉 大吾

「森が、街が、図工室」北海道教育大学附属旭川小学校は、そんな言葉が似合う。外へ飛び出す図工の学習が本校の教育課程にはたくさんある。旭川は「彫刻の街」。6年生は屋外彫刻を見に行く。5年生は冬祭りの氷彫刻を。学校には「附小の森」という雑木林があり、そこでの造形遊びもダイナミック。日本一広いと言われる敷地内に色とりどりのビニル袋やテープが張り巡らされ、新聞紙が舞う。担任する3年2組の子どもたちも外に飛び出しての活動は、ホントにいい顔をしている。そして実に「瑞々しい感性」だと思う。

昨年7月、全道造形教育研究大会旭川大会が開かれた。旭川の画家、萩原常良先生の作品を鑑賞する授業。旭川の冬の街並みを描いた作品に子どもたちは目をキラキラさせて見入っていた。最後に萩原先生のご登場。子どもたちは先生とのおしゃべりに夢中になっていた。

秋の小学校の森では、はらわれた枝をトントンギコギコ。「そっちおさえてて！」「ＯＫ！」。「うわー、何だかわからないものになってきたぞ！」「その方がおもしろいじゃん！」おしゃべりや会話といったレベルでなく、叫びに近い声が飛び交う。

3年2組の子どもたちはこの森で感じ、思いのままに表す。街では美しさ・おもしろさを求め、動き回る。子どもの感性は自然に生き、街に学び、地域に育てられているとつくづく思う。

幸いにも旭川には、その瑞々しい感性を引き出したいと日々願う図工・美術教師、学芸員、画家や造形作家がたくさんいる。旭川市全体が「大きな図工室」として、豊かに育ってくれたら、なんて素敵だろう。みんないっしょに「大きな図工室」へ飛び出そう！　さあ、今日は雪でいっぱいつくろうか！

（いずみ　だいご）

図工室

自信につながる図画工作の授業を

広島県東広島市立東西条小学校　沼田 典子

私は、小学校で通常の学級の担任をしています。約30名もいれば、いろいろな子どもたちがいて、毎日楽しい話題に事欠きません。担当教科は全教科ですが、毎週の図画工作の授業を楽しみにしています。図工の授業づくりには、心が弾みます。

理由は、学校生活の他の場面で、自信がなさそうにしている子どもたちが、図工の授業では、生き生きとして、いい笑顔になれることがあるからです。図工で子どもたちが見せてくれる表情や姿は、子どもたちの自信につながり、それは教師としての喜びでもあるからです。

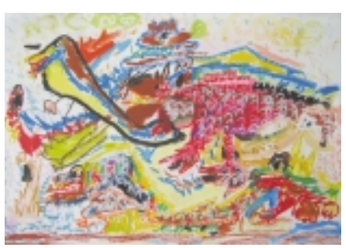
出会った子どもたちの中で、印象に残っているＡ君を紹介します。低学年で担任しました。

体育のドッジボールでは、ボールが怖くてコートに入れず、隅で座り込んでいました。算数や国語のノートの字は、やっと書いても筆圧が弱いし、マス目に入っていなくて読めません。学校は一度も休んではいませんが、ある時泣きながら登校してきました。「ティラドンがでた…」よく聞くと、どうやら昨晩の夢に出てきた恐竜らしい…。

そんな中でティラドンは、図工のモチーフとしても登場します。表したいことはいっぱいあるようなので、さらに具体的に引き出し、描画材料を扱い易いように配置するなどの工夫は、個別の支援として行いました。

制作途中や制作後の鑑賞タイムでは、級友が褒めてくれました。「元気賞だね」と周りの先生からもあたたかい声かけが。大事に大事に新聞紙にくるんで持ち帰った作品を、お母さんも喜んでくださいました。Ａ君はすっかりご満悦。

Ａ君は図工が大好き。認めてもらえると、自信につながります。毎日を笑顔で過ごせます。　（ぬまた　のりこ）



何をつくろう？

愛知県豊橋市立本郷中学校　菊池 弘子

新年度がスタートすると、「今年は何をつくろう」と生徒の顔を見ながら考える。今回は「おもしろい顔」をテーマに、園芸用のやし皮素材を土台にさまざまな自然材を使って表現する題材を設定してみた。

美術室に無造作に置かれていた松ぼっくりから始まり、生徒たちは木の実、つる、貝殻、流木、しゅろ、藁、ススキなど、いろいろな材料を集めてきた。授業の度に種類や数が増した。蝉の脱殻を集めてきた生徒のまわりでは、「どうやって使うのか？」という談義で盛り上がる。生徒たちは材料を加工したり、接着したり、縫いつけたりと各自が“思い”をもち、こだわって制作を進めていった。広い美術室をフルに使い、時間を忘れて制作に没頭した。発言も「どうしたらいいですか？」ではなく、技術的な面でも、表現の面でも、「こうしたい」というものに変わっていった。

美術の時間数削減となって以来、準備、片づけの時間を気にして、教材キットに飛びついてしまいがちなのだが、所せましと材料や道具が並ぶ美術室で、生徒が材料集めから手間ひまをかけ、試行錯誤を繰り返す過程こそが大切なのだと実感した。制作では、技術を押さえつつ、表現方法や生徒の学びを紹介するなどして支援指導してきたが、何より生徒同士の関わり合いが重要な一面であったと感じた。一人の表現が周りに響き、刺激となって新たな表現を呼び起こした。互いの表現を深め、学級の高まりへとつながっていった。また、生徒にとって友だちの発言は、ヒントとなり、自己表現に不安をもっていた生徒にとっては安心して制作に立ち向かうきっかけとなったのではないだろうか。

今日も、「次は、この子たちにどんな作品づくりをさせようかな」そんなことを考えて授業に取り組んでいる。

（きくち　ひろこ）

美術室

子どもとともに

佐賀県白石町立白石中学校　井手 典子

初雪が降りました。昨日の夕方からちらちらと小雪が降ってはいましたが、朝起きて窓を開けると一面真っ白な雪で覆われていました。子どもの頃は雪が積もると妙にうれしくなったものです。

今では「車にチェーンをつけなくても大丈夫かな」とか「早めに家を出ないとのろのろ運転だろうな」とか、何でも仕事につなげて考えてしまい純粋に自然の美しさや偉大さを感じることが少なくなってしまっているような気がします。果たして子どもたちはどうでしょうか。

ゲームには夢中になる時間はあるけれども、自然の音や色をじっくり見つめたり感じたりする時間はどんどん減っているような気がします。そういう子どもたちにどうやったら、どういう声かけをしたら感性や個性が育つのか…。

この頃の美術の授業では、今まで半強制的だった指示が「無理してやらなくてもいいよ」「できればやってきなさい」という指示に変わってきました。こういう優しい(？)声かけでも、昼休みなると数人の子どもたちが作品づくりにやってきます。

朝の会の前や昼休みには、作品を持ってアドバイスをもらいにやってきます。忘れ物をする生徒も少なくなりました。丁寧にゆっくりとやり方を教え、できた時に褒めてあげることを繰り返すうちに、子どもたちも変わってきました。

子どもの実態によって、どういうやり方が効果的か、またどんな教材に熱心に取り組めるのかを我々教師が見極め、努力していかなければならないと感じます。今までの教え込みだけのやり方だけでなく、＋αを常の頭に入れながら子どもたちと共に自分自身も変わっていっています。

強制ではなく、自主的に取り組める環境をつくっていくことで子どもたちの主体性が生まれ個性が育つことを信じて、美術教育に力を注いでいきたいと思っています。　（いで　のりこ）

地域のアート

せんだいメディアテークとの取り組み

宮城県仙台市立木町通小学校　山﨑　睦子

1．はじめに

ケヤキ並木の美しい定禅寺通りに面して建つスタイリッシュな建物。それがせんだいメディアテーク（smt）。市民図書館など市民の憩いの場として、さらに美術や映像文化の活動拠点として、利用者も多い。本実践は、そんな施設の特色を生かし、smtとの連携事業の一環として仙台市立木町通小学校６年生２クラスが行った取り組みである。

2．映像表現との出会い

○「子どもたちと映画を見よう」（2009年6月）

７階スタジオシアターでの上映会に学年で参加した。子ども向けの映画ではなく、大人も子どもも一緒に共感できるような作品を鑑賞した。その後「映画って何？　どうやってつくるの？」といった疑問に答える形で学芸員の小川直人氏に、「映画のひみつ」についてお話をいただいた。実際のフィルムに興味津々でさわる子どもたち。この出会いをきっかけに、１組２組それぞれの取り組みが始まることとなった。

3．映像作品を作ろう（7月）

技術・機材の提供、講師の招聘をsmtが担当し、木町通小学校にて出前授業が行われた。

○授業「映画監督の仕事」

木町通小卒業生の日向寺（ひゅうがじ）太郎氏（『火垂の墓』『誰がために』監督）を迎えて、映画監督の仕事や、映画の仕組みについてお話を伺う。「撮ることによって、よく見ること」について学ぶ。

○ 2組授業「映像作品づくり　いつもの通学路」

一人ひとりが、家から学校までの通学路をビデオカメラで撮影（５秒×24カット）、自分だけの映像を撮る。そのあと、日向寺監督も交え披露試写会を行った。どの作品からも、その子なりの目線や感じ方が伝わってきた。

4．コマ撮りアニメーションを作ろう（11月）

東北造形教育研究大会でsmtのオープンスクエアを使っての授業（１組・担任伊藤信正）が決定した。機材・技術の提供はもちろんのこと、授業づくりの段階からsmtの学芸員小川氏や白井浩氏に相談にのっていただくこととなった。

○1組授業「映像表現ってどんなもの？」

smtで映画の歴史や特徴について学んだ。コマ撮りアニメを作るために「館内探検」を行い、主人公となる素材を探した。

○1組授業「おどれ！　ぼくらのイメージ」

東北大会当日はインフルエンザのための学年閉鎖でワークショップのみの実践となったが、後日、１階の広々としたオープン・スクエアでコマ撮りアニメづくりの授業が行われた。椅子や展示用の台などに命を吹き込みながら、子どもたちは夢中になって活動した。

5．おわりに

映画『いつもの通学路』とコマ撮りアニメ『おどれ！ぼくらのイメージ』については、全員の作品を収めた卒業制作DVDを制作中である。その作業も、もちろんsmtのご協力を得て進めている。

最先端の技術や情報を備えた公共施設との連携というと敷居の高いものと考えがちだが、smtの皆さんは気さくに、そして熱心に専門的な視点からさまざまなアドバイスをして共同で活動を繰り広げてくださった。美術・映像・メディアに関するすばらしい人材と技術を学校教育の中で生かすためにも、今後も勇気をもって、その門戸を叩いていきたい。

（やまざき　むつこ）

造形ピックアップ

第4回「子どもアートオリンピック」

日本アートオリンピック組織委員会事務局　川島　真紀雄

1．日本の組織委員会設立について

アートｅラーニングセンターでは、昨年７月にアメリカにある「国際子どもアート財団」から第４回アートオリンピック（2009-2012）日本組織の誘致を受けました。以前に学校から個別応募を行い、語学や経費等で苦労した想いがありましたので、日本組織委員会を設立して活動に協力することにしました。

2．大会のねらいについて

他教科では、算数やロボットなど児童・生徒の能力や競い合いでオリンピックが盛り上がっているようです。しかし、この大会は「Building Peace through Art and Sport」、まず芸術とスポーツで平和をつくろうとしています。アートオリンピックの目的は、異文化間と宗教間の寛容と協力のオリンピック理想を促進することです。そして、児童には創造性を生涯持ち続けることを促しています。

第3回子どもフェティバル（World Children's Festival）大会HPより

3．参加のお願い

大会本部のHP（http://www.icaf.org/）は、日本語でも読めるようになっています。前回世界で300万人も参加した大会ですが、日本からの参加はごく僅かでした。３月が締め切りです。是非皆さんの学校から１枚作品を送っていただきたいと念じています。

（かわしま　まきお）

大会HP：
http://www5f.biglobe.ne.jp/~eLearning/Olympiad1.html

造形プラザ

「横浜版学習指導要領　指導資料編」について

1．横浜版学習指導要領とは

横浜市では、国の学習指導要領の内容をふまえた上で「横浜教育ビジョン」で示す“よこはまの子ども”の実現を目指し、各市立学校の創意によってつくり出される教育活動の土台となる教育課程の編成・運営・改善をサポートする「横浜版学習指導要領　総則・総則解説」「同教科等編」（平成21年３月）を策定しています。それに引き続き、この度、さらに具体的なカリキュラムや実践例等を盛り込んだ「横浜版学習指導要領　指導資料編」が策定されることになりました。

2．図工・美術の全題材を網羅！

この指導資料編（図画工作科・美術科）の最大の特徴は、各学校のカリキュラム編成及び、カリキュラムマネジメントを支援するツールとして、図画工作科・美術科の小中一貫ベースカリキュラムを示した点です。図工（94題材）・美術（25題材）の全ての年間題材配列を一つの表にまとめた「９年間の題材配列」、各学年の題材配列と題材ごとの学習活動の内容等を示した「各学年の年間題材配列」、各題材の詳細な内容をＡ４サイズにコンパクトにまとめた「年間指導計画（題材カード）」により構成されています。付録のＣＤに納められているベースカリキュラムのデータを活用し、各学校のカリキュラムにアレンジすることもできます。また、ＣＤには、第３章に掲載の指導事例の授業映像と資料、実際の授業に役立つ展示の仕方や掲示物の工夫のポイントなどもデジタルコンテンツとして納められています。

全国的にも注目されている「横浜版学習指導要領」。横浜市以外の教育委員会や教職員も必携の手引書となるでしょう。